

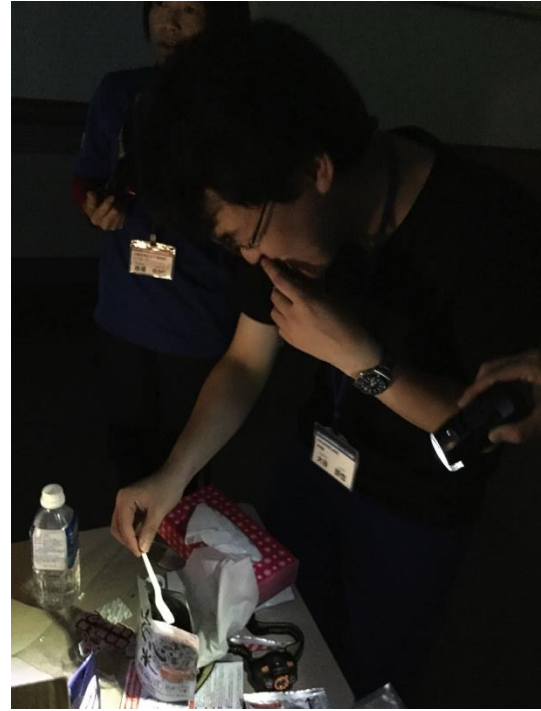
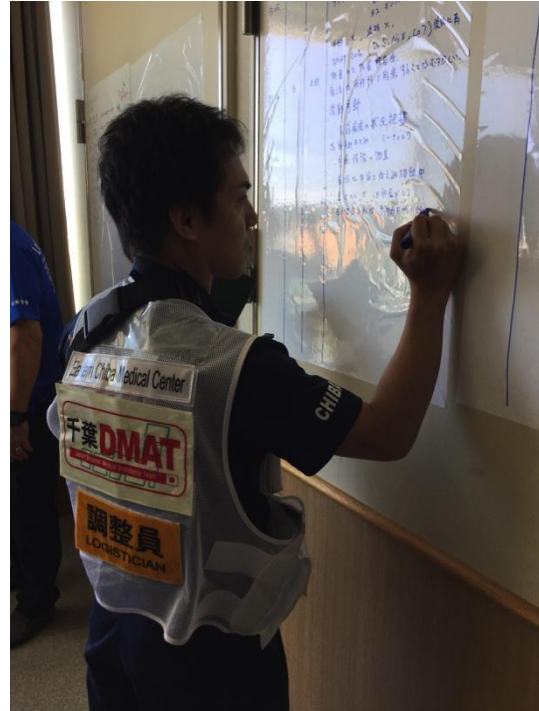
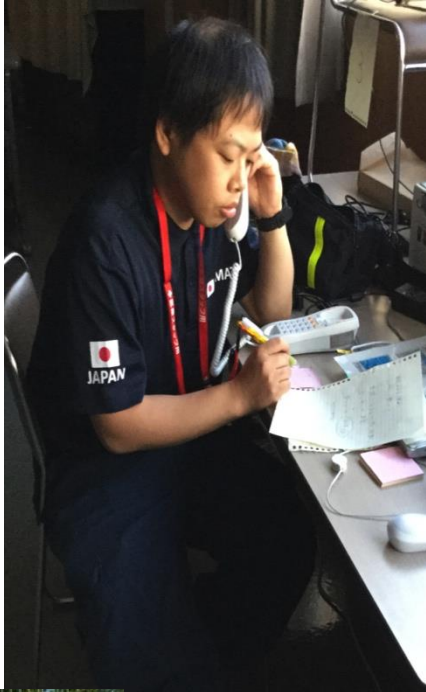
実践研修報告



B班

岩手 with B ~35億~

岩手 with B メンバー



1.ロジスティクスの基礎

①派遣目的地までの円滑な到達

- ・8/25に予定経路を決定、今朝も通行止めが変わりがないか確認
- ・移動中にもラジオで道路状況を確認しながら経過。また、休憩先のパーキングエリアで衛星電話を立ち上げ EMISにて最新の情報を入手。
- ・余震発生時の対応のルールを決め、コンボイで移動。
- ・目的地が同じチームと連携をとって移動。(トランシーバーでの連絡連携、休憩場所での安否確認を行う)
- ・途中でタイヤパンク!?→みんなで協力してスペアタイヤへ交換
- ・移動中もガソリンスタンドや食料品店など今後の活動に有用となる場所をマッピング



②衣食住の確保

・衣：日中と夜間の温度差が大きいため、適宜衣類にて調整を行った。

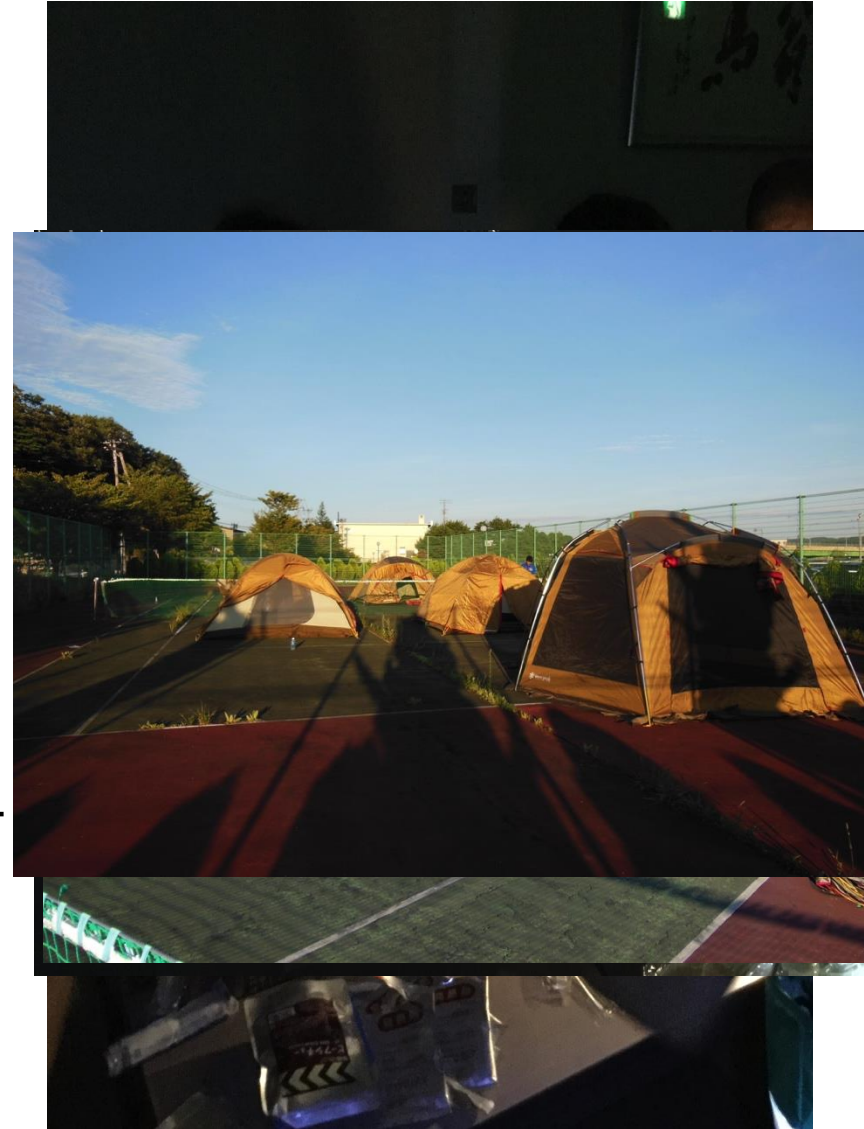
・食：保存食や水は持参

ホットシートの数に限りがあるため、ダンボールを使用し多量の食べものを温めた

屋内の使用時間に合わせて、食事を作成した

・住：上位組織より自力で宿泊場所を探すよう指示あり。派遣先病院に確認すると駐車場横のテニスコートを貸していただけただため、そちらにテントを張り野営。テント3つ(男性用、女性用、本部用)、簡易用トイレ設立。

セキュリティーとしては、場所は駐車場近く、テニスコート全周を柵で囲われており、入り口も閉鎖可能。近くに建物はなし、テニスコートも地割れなし



2.拠点での本部立ち上げと本部内におけるロジスティクスの役割

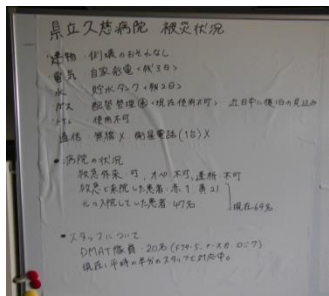
活動拠点本部の久慈保健所から指示され、県立久慈病院にて活動開始
依頼された内容：**県立久慈病院の現状報告**

①拠点でのカウンターパートとのコミュニケーション

- ・県立久慈病院でのカウンターパートは「外科部長の寺澤医師」。院内の際对本部との連携もして下さる。
- ・病院の現状：建物は倒壊の恐れなし、電気は自家発電（燃料は残3日）、水は貯水タンク使用中（残2日）、医療ガスは配管の確認がまだであるため使用していないが近日中に使用可能となる見込、トイレは使用不可
- ・水が使用できないため手術と透析は行えない。救急外来は稼働しており、多数の傷病者が来ている
- ・院内にはDMAT隊員が20名おり、院内災害対策本部で活動中。
- ・現在、院内のスタッフは平時の半分ほどの人数。発災より2日間働き通しのためかなり疲労が強くなってきている。（特に救急外来）

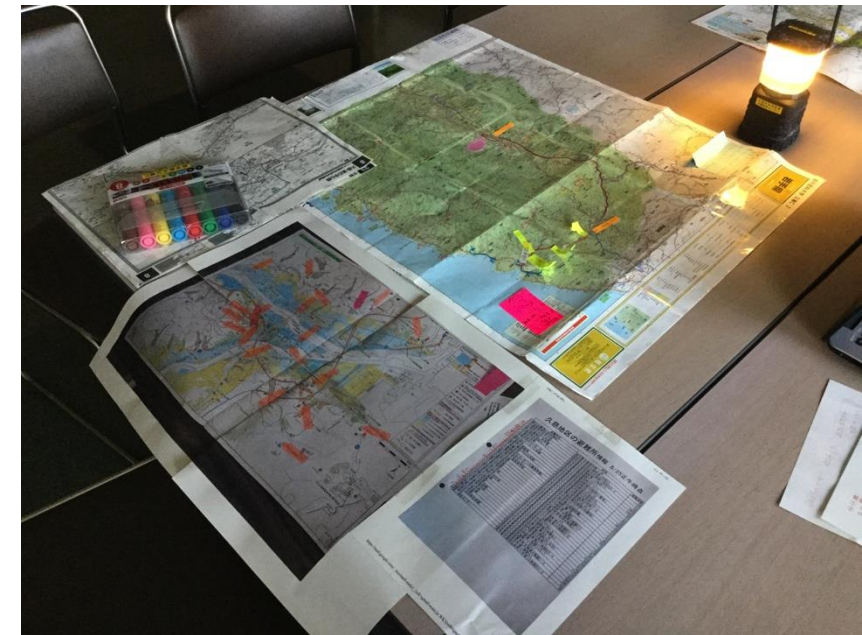


スタッフを休憩させたい
インフラが壊滅状態のためいつまで持つかわからない
多数傷病者が連日受診しておりキャパオーバー状態



②情報伝達手段の構築および通信訓練

- ・上位組織の久慈保健所とは衛星電話やメールで連絡を取ることとしたので、衛星電話4台(電話用:受用・発用、呼び2台)
- ・連絡先についてはコンタクトリストを作成
- ・安否確認も含めて、定時連絡を取っていた
- ・データやマッピングはデータ通信にて共有
- ・院内のスタッフとは直接会ってコミュニケーションをとった
- ・メンバーが別の場所で活動する際にはトランシーバーを使用し連絡を取り合った
- ・チームとして余震時の対応をあらかじめ決めておいた。(余震時の集合場所、連絡方法など)



③情報の集約と活用

病院のカウンターパートや保健所から収集した情報は、クログロー、To Do listを作成し問題点を抽出した

- ・久慈病院では発災後よりスタッフが働き続けている。また、多数傷病者が受診しており疲弊してきている

救急外来の交代要員を求めている

→活動拠点本部(久慈保健所)に状況を説明し、支援医療班・DMATを要請

- ・発電機の燃料が不足しており、節電しても残り70時間持つかどうか
→活動拠点本部(久慈保健所)に重油300L依頼し、調整をかけてもらう

- ・津波被害の患者が多数来たため、酸素が不足
→活動拠点本部(久慈保健所)へ液体酸素と酸素ポンベの依頼

- ・近隣の病院より妊婦の搬送依頼あり
→搬送手段を活動拠点本部に確保してもらい、受け入れ実施

- ・活動拠点本部(久慈保健所)より当院近くの避難所アセスメント依頼あり。
→マンパワー的に自隊から人員を出せなかったため、カウンターパートに相談し支援DMAT1隊に依頼した



3. 多職種間の連携

① 各組織特有の手法などについて

- ・DMATのマッピングの作成方法が参考になった
- ・DPATの活動内容を知ることができた



② 多組織間の協働方法の検討

- ・カウンターパートを介して院内の情報収集と活動方針を立てており、院内の医療ニーズの抽出に困難はなかった。
- ・支援DMATの依頼は私たち医療班が行ったが、管理が院内の災害対策本部であったため、支援DMATに業務の依頼をして良いのか戸惑いもあった。
- ・上位組織とは衛星電話の音声通信で情報共有を行っていたが、メール配信もできたため、具体的な内容はメールで連絡したほうが情報の錯綜をより防げると感じた。

クマ出
注



兄

弟